

ダムを活用したインフラツーリズムの取り組み

～建設中のダムを事例として～

なかつくま まさゆき
中津熊 真幸*

近年、ダムを観光資源として地域振興に活用するダムツーリズムが広がっている。ダムツーリズムでは、国や地元自治体、地域住民等が連携し、外部から人を呼び込むための様々な取り組みを進めており、現在事業実施中の立野ダム等における取り組み内容を事例として紹介する。

1. はじめに

近年、ダムでは、元々の目的である治水、利水への利用だけに留まらず、ダムの堤体や貯水池等を観光資源として、地域振興に活用するダムツーリズムが広がっている。

このような取り組みは、ダムの整備に伴い、住居の移転等、住民生活に影響が生じる水源地域において、地域活性化の契機となり得るだけでなく、近年、災害が頻発・激甚化する中、ダム下流部の住民等、幅広い人々にダムの役割や機能に関心を持ってもらうきっかけとしても大変有意義なものとする。

ダムツーリズムは、従来、完成したダムを中心に行われてきたが、工事実施中の現場そのものを対象とする取り組みも盛んになってきており、本稿では、現在事業を実施中の立野ダムにおける取り組み等、建設中のダムにおけるダムツーリズムについて、いくつかの事例紹介を行う。

2. 立野ダムにおける取り組み

立野ダムは、下流域に九州第3の都市である熊本市を抱える白川の治水を目的として建設を進めているダムである。

一方で、白川の上流域の阿蘇地域は、全域が「阿蘇・くじゅう国立公園」に指定された雄大な自然が広がる地域であり、平成28年の熊本地震後に観光客数の落ち込みもあったことから、阿蘇の観光資源

と立野ダムを連動させた観光商品の具体化及び、インフラツアーを商品化することで、より多くの観光客を南阿蘇村に誘引し、地域振興に資することを目的に、立野ダム工事事務所、南阿蘇村、観光協会等で構成する「阿蘇・立野峡谷ツーリズム推進協議会」が、平成30年4月に設立された。

この協議会では、立野ダム周辺での新たなアクティビティの検討、観光ツアー・商品開発及び、持続可能な体制作りについて議論を重ねられており、その結果、これまで、

- ・立野ダムの工事現場を背景に自分だけのダムカードを作成出来る「マイダムカードフォトフレーム（写真-1）」の設置
- ・南阿蘇村の旧小学校の一部を利用したダムの広報施設「あそ立野ダム広報室」の開設
- ・立野ダム工事事務所でのみ配布していたダムカードの地元商店での配布
- ・立野ダム近隣の店舗にて南阿蘇村の野菜を使ったダムカレーの販売

等の取り組みを実施している。

さらに、令和2年3月からは立野ダムTシャツ、令和元2年7月からは缶バッジの販売も開始するなど、積極的な展開が行われている（写真-2）。

また、インフラツアーに関しては、観光の力で平成28年の熊本地震からの復興を支援することを目的として、跡見女子学園、阿蘇・立野峡谷ツーリス



写真-1 マイダムカードフォトフレーム



写真-2 開発された商品
(上段:Tシャツ、下段:左からバッジ、日本酒、ダムカレー)

ム推進協議会、株式会社JALパック等の産学官が連携する「南阿蘇観光プロジェクト」を平成30年5月に発足した。

このプロジェクトでは、参画したそれぞれの者が、インフラツーリズムに関する素材提供、提供素材を踏まえたツアーの開発・監修、そしてそのツアーの販売を担っており、立野ダムインフラツーリズム、阿蘇のカルデラがどのように生まれたか等の阿蘇の自然を学ぶジオツーリズム、熊本地震の被災地を訪れて防災の大切さを学ぶ防災・復興ツーリズム、の3つを組み合わせたモニターツアー(表-1)を実施したところ、JALパックアワード2018企画部門の金賞に表彰された。

ダムツーリズムは、水源地域の活性化が大きな目的であることから、ダムの完成前だけでなく、完成

表-1 モニターツアー行程

1日目	
行程	備考
羽田空港	
↓	
熊本空港	
↓	
俵山展望所	ジオツーリズム
↓	
東急ゴルフクラブ	立野ダムカレーを堪能
↓	
阿蘇大橋崩落現場	防災・復興ツーリズム
↓	
立野ダム展望所	ジオ+インフラツーリズム
↓	
立野ダム工事現場	ジオ+インフラツーリズム
↓	
布田川断層・カヌー体験	ジオ+インフラツーリズム
↓	
リムトンネル見学	インフラツーリズム
↓	
ホテル(南阿蘇村内)	
2日目	
行程	備考
ホテル発	
↓	
阿蘇中岳火口	ジオツーリズム
↓	
地獄温泉清風荘	復興支援(ウォーキングツアー)
↓	
南阿蘇鉄道トロッコ列車	復興支援(レストラントレイン)
↓	
道の駅あそ望の郷くぎの	復興支援(お土産)
↓	
阿蘇明神池名水公園	カップ伝説の銘水を堪能
↓	
熊本空港	
↓	
羽田空港	

後も地元の力で引き続き取り組まれることが重要である。

このような観点から、立野ダムでは、ダム完成後も含めて、地域が自立してイベントを継続出来る仕組み作りとして、立野ダムや工事状況等を説明できるガイドの育成にも取り掛かっており、第一弾として、南阿蘇在住の阿蘇ジオパークガイドを対象に、立野ダムに関する講義と現地研修を実施し、令和元年10月に南阿蘇村村長が「阿蘇立野峡谷(立野ダム)ガイド」の一期生を認定するとともに、(一社)みなみあそ観光局が、認定されたガイドの手配等の運用体制やガイド料金も定めている。

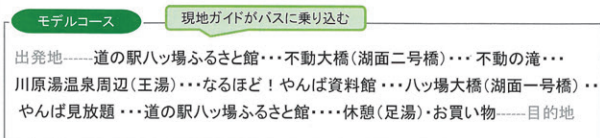
3. ハッ場ダムにおける取り組み

令和元年度で事業完了したハッ場ダムは、事業実施中、ダム現場を見学するインフラツアー「やんばツアーズ」の実施や建設中のダム現場を一望できる無料の展望台「やんば見放台」の設置、ダムカード提示による地元商店街での特典付与等、地域と連携

した様々な取り組みを行い、TV等マスメディアでも度々取り上げられるなど、まさにダムツーリズムの代名詞のような存在であった。

このハッ場ダムにおいても、ハッ場ダム工事事務所が主体に行ってきたインフラツアー「やんばツアーズ」を令和元年9月をもって終了し、令和元年10月以降は、地元主催のツアー（図-1）を中心とした地域主導の取り組みへ転換してきており、ダム完成後もダムツーリズムを継続、発展させている。

また、民間企業によるダム管理用地を利用した観光施設の整備（キャンプ場等）、湖面の利用（カヤック、水陸両用バスの運行等）及びダム湖内におけるバンジージャンプ施設の運営といった、新たな取り組みも進められている。



※ご案内時間は約1時間のコースです。コース内容については、ご要望により変更可

図-1 地元主催ツアーの行程（パンフレットより抜粋）

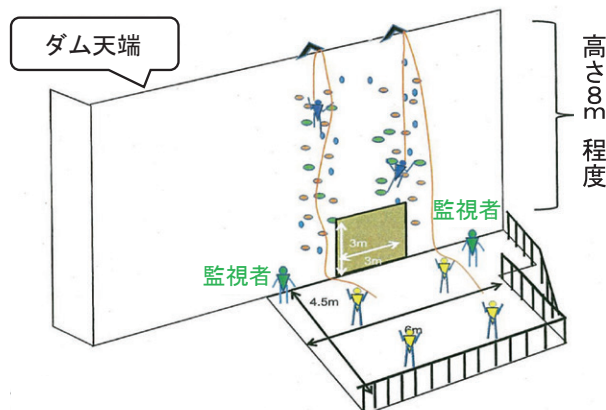


図-2 クライミング施設イメージ



写真-3 クライミング施設の様子

4. その他ダムにおける取り組み

これまでに紹介した事例以外にも、ダムを活用した新しい取り組みをいくつか紹介する。

令和元年度に事業完了した横瀬川ダムでは、地元自治体である宿毛市が実施主体となり、日本で初となるダム堤体にクライミング施設を整備した。

実施にあたっては、宿毛市と中筋川総合開発事務所の間で、施設の運営・利用設備の点検に関する事項や、ダム壁面にクライミング施設を設置することによる安全面について、約1か月の事前協議を行い、令和元年10月にオープニングイベントを実施している。

また、熊本県にある緑川ダムでは、地元自治体である美里町が、緑川ダム湖周辺の観光振興及び活性化を目的として、森林を活かしたスポーツ施設であるフォレストアドベンチャー（森林体験公園）を整備しており、ダム湖を横断するジップラインが設置されている。

このように、ダムの景観や周辺の景色を楽しむ取り組みだけでなく、体験型の取り組みも増えてきている。

5. おわりに

本稿では、立野ダムでの取り組みを中心に、現在実施されているダムツーリズムの取り組み事例を紹介した。

今回紹介した事例が、皆様の参考になれば幸甚である。

